Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-15

想像の共同体の現実化の場所としての夜市 : 社会的余暇活動による経験の共有に注目して

藤岡, 達磨

(Citation)
社会学雑誌,33:180-199

(Issue Date)
2017-08-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0041389

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041389

想像の共同体の現実化の場所としての夜市

――社会的余暇活動による経験の共有に注目して――

藤岡達磨
神戸大学大学院人文学研究科非常勤講師

本稿は、台湾における夜市を、想像の共同体を現実化し保証する経験をもたらす場として捉えようとする試みである。『想像の共同体』の著者のベネディクト・アンダーソンは、台湾におけるナショナリズムを「クレオールナショナリズムのアジア版」と評したことがある。[1] この「クレオールナショナリズム」においては、国民語や出版資本主義は未発達であり、「巡礼圏」と「コミュニオン」が想像の共同体の成立を支えている。本稿では特にこのコミュニオンと関係する制度として夜市を捉える。この観点から見ると夜市における経験は、従来とは異なる境界的（非政治的）な秩序の中で、共同体を現実に存在するものとして経験することである。そして、このような経験は結果として「私たち」という共感を構成し、想像の共同体を現実に存在するものとして確信させる。つまり、夜市に代表されるような空間は、都市社会の中で想像の共同体を具体化し、その構成者たちにとって共同体を現実化させる機能を担っていると考えられる。本稿では台湾における夜市調査の資料を用いて、共同体を感じる場としての夜市がどのような機制によって成立しているのかについて検討し、この場が想像の共同体の現実化について寄与している可能性について論じる。

はじめに

台湾には夜市と呼ばれる市場がある。台湾の観光局の調査によれば、夜市は最近一〇年間、故宮博物院などと並んで旅行者の訪れる主要な地点の上位三位に常に入っており（中華民国交通部観光局　二〇一二年）、旅行者にとってまたホストにとって「台湾らしさ」を代表する空間として認識されている。またこのことは夜市の場での経験が、参加者にとってそこでしか手に入らない「独自性」を持っていると考えられており、文化的な資源として機能していることを示している。

しかし、この場合の夜市における経験の「独自性」とは

何を指すのだろうか。一見すると日常的な消費行動と差がないように見える夜市の場の経験は、どこが「独自」であるのだろうか。そして、夜市の参加者たちは、どのような特別な経験を求めて夜市にやってくるのか。この点を明らかにするには、台湾社会における政治・「族群」[2]的な区別が日常的に顕在化している状態と夜市における非政治性が注目される必要がある。このような夜市での経験に代表される境界的な場における匿名的な共同行為が、意図せざる結果として「台湾」社会[3]の土台となるコミュニティ意識の形成と関わっている可能性を、アンダーソンの「クレオールナショナリズム」と若林正丈の「巡礼圏」の議論を下敷きにしながら検討していきたい。

一章　クレオールナショナリズムとしての「台湾」意識

一節　クレオールナショナリズム

まずクレオールナショナリズムについての検討に入る前に想像の共同体としてのナショナリズムについて確認を行う。アンダーソンに代表されるナショナリズム研究の近代主義者たち[4]は、ネーション（国民）という共同体を近代以降に構築されたものであるとする立場を採っている。例えば、アンダーソンにとってネーションとは「イメージとして心に描かれた想像の政治共同体」[5]である。一般にアンダーソンは想像の共同体という枠組みによってネーションの出現を説明しようとしたと考えられており、アンダーソン自身の意図もおそらくその一般的な認識から大きく外れていない。しかし、同時に想像の共同体というアイデアはネーションの解明の道具としてだけに留まることなく、幅広い分野で応用されている。例えば、本稿で後述する若林はこの想像の共同体の問題設定から、自律的な「全体」でありながら、他の「全体」にとっては「部分」であるような、そうした「地域」の二重的実在としての台湾について議論を行っている（若林　一九九四：二五―二六）。本稿ではこの二重的な意識の構成について、他者との関係の中で「私たち」はいかに実際に想像されうるのかという観点から議論を行う。

アンダーソンは二〇一二年の奈良女子大学における講演「アジアのナショナリズム」において、「アジアのナショナリズム」と呼べる単一のものは存在しないことを述べた上で四つのナショナリズムの類型を挙げた――　1．クレオールナショナリズム、2．言語と民族に基づくナショナリズム、3．公定ナショナリズム、4．反植民地ナショナリズム。そして、このうちアジアにおけるクレオールナショナリズムの分かりやすい例として台湾を挙げている（アンダーソン　二〇一四：一五―一六）。クレオールナショナ

リズムという類型についてアンダーソンの整理にしたがって簡単に確認し、台湾における事例について検討する。

アンダーソンによれば、「クレオール（Creole）」という言葉はスペイン語に由来する言葉で、「エスニックな意味でも文化的にもスペイン系の人間でありながら、スペインから数千マイルも離れた場所、例えば中南米でその生涯を過ごしてきた人」を指す（アンダーソン　二〇一四：一六）。つまりクレオールたちは言語や宗教や民族の面で、本国で生活している人々と差異がなかった。ここから中南米のクレオールナショナリズムの成立に関してこれら三点は争点になりえなかった。同様にナショナリズムの成立としばしば結びつけて語られる「出版資本主義」はまだこの新大陸に影響力を持っておらず[6]、「読書人」としての中産階級は社会の中で取るに足らない存在だった。

アンダーソンによれば、クレオールナショナリズムの発生の要因は「南アメリカの新生共和国が、かつてはそれぞれ、16世紀から18世紀にかけて行政上の単位であった」事実に求められる（Anderson [1983] 2006＝二〇〇七：九七）。このような行政上の単位による世俗的巡礼圏の形成によって、言語と出版資本主義を基盤としない共同意識が構成された。

巡礼圏は中心と巡礼の旅の経路を設定することによって、他者同士の出会いを誘発する制度である。若林はこのアンダーソンの概念を用いて、行政単位が作り出す世俗的な巡礼圏が台湾意識と中華意識を形成したことを述べている（若林　一九九四）。ではここで、彼の議論を追いながら台湾という想像の共同体が巡礼圏によってどのように立ち上がってきたのかについて確認していきたい。

若林によれば、現在台湾に見られる「中国人」意識と「台湾人」意識は、それぞれ北京を中心として形成された中華王朝の「士大夫の巡礼圏[7]」と、台北を中心として日本植民地支配下に形成された台湾サイズの巡礼圏である「台湾大の巡礼圏」に歴史的根拠を持っている（若林　一九九四：三二）。「士大夫の巡礼圏」については、清の統治下において台湾でも科挙が実施され、他の地域に比べれば層の薄いものであるものの、台湾社会にも士紳[8]層が生まれた（若林　一九九四：三三）。この士紳層は北京を中心とする巡礼の旅によって、中国の一部としての台湾という意識を保持していた。続いて「台湾大の巡礼圏」については、日本の植民地支配を通じて台湾社会は史上初めて末端の村落レベルまで到達して社会を動員できる能力を持った近代的国家によって統治された。そして、日本国の工業化推進のための食糧供給基地・本国消費材工業の市場としての役割を果たすため、交通・通信・行政機構・学校体系などの開発に伴い、今日において「台湾」と呼称されているサイズの領域内部における社会統合が実現されていった（若林　一九九四：

三五―三六)。

この二種類の巡礼圏とそれに伴う二つの「私たち」意識は、台湾の中国復帰後、より捻れた形で保存されることとなる。この捻れの原因は、一方で国民党が日本の用意した植民地国家の制度と構造をそのまま継承したことから生じる本省人・外省人間の巡礼圏の断絶であり、他方でこの中華ナショナリズムが観念的には中国全土をその範囲としているはずであるのに、実際的な範囲としては中国大陸を除外したものとして現れざるをえなかったことが影響している。この捻れの結果、日本の植民地支配によって生まれた台湾サイズの巡礼圏が、国民党バージョンの再中国化システムの「裏側に張り付いて」非公式に復活・継承されてしまった(若林 一九九四:四一―四四)。以上が若林による巡礼圏を用いた「台湾」意識と「中国」意識の発生についての説明の概要である。

二章 制度と意識の結びつき

一節 巡礼圏の生み出す意味

ここでアンダーソンがクレオールナショナリズムの成立に関して、「『自然』地理的あるいは政治的・行政的市場圏は、それ自体としては、人々の愛着を生み出しはしない」(強調は原文ママ Anderson [1983] 2006 = 二〇〇七:九八)と述べていることを考えれば、若林の巡礼圏による「私たち」意識の発生の説明にはいくつか補わなければならない点があるように思える。つまり、行政単位が「いかにして祖国と考えられるようになるかを理解するには、我々は行政単位がどのようにして意味を創造するのかを見なければならない」(Anderson [1983] 2006 = 二〇〇七:九八)。単に制度の変化の問題だけでなく、その制度の変化がもたらした巡礼者たちにとっての意味の変化に注目しなければならない。

このような行政単位の設定は、世俗的巡礼の旅[9]によって、特定の範囲の人々に共通の中心性の経験を生み出した。中心の設定によって巡礼の旅の経路を決められた巡礼者たちは、そうでなかったら出会わなかったはずの旅の道連れと出会った。同様の形で日本の植民地統治下の台湾では、この他者との出会いによる共同体の実在の実感は、公教育や徴兵制度などにより更に多くの人々を含む形で、その巡礼の旅に参加している人々に共有されていった。アンダーソンはこのような世俗的巡礼の旅の事例として、公教育による学生の巡礼、軍隊における軍人の巡礼、官僚機構における文人の巡礼などを取り上げる。

世俗的巡礼の旅は、同じ生活圏にいながらその人生設計の経路を共有しない人々との(多くの場合不平等な)対比によって、言語や宗教や民族によらず新たな想像の共同体

を発生させる。旧大陸出身者と新大陸出身、宗主国出身者と植民地出身者、彼らは生まれた場所以外の点ではほとんど違いがなかったにも関わらず、参加すべき世俗的巡礼の旅の経路が異なった。このような生まれの違いによる人生のそして生活の行きうる範囲の限定が、あるカテゴリーの人たちに共有されたことが、共同体が分離する際の契機になった。

共同体意識の発生には、巡礼圏による出会いの制御に加えて、その場での同調した共同行為による共感の醸成が必要である。このような想像の共同体を成立させる経験として、アンダーソンは「コミュニオン（communion）」という概念を用いる。これは「共感を伴った同調した共同行為」を指す。アンダーソンは想像の共同体の存在をめぐる確信は、このコミュニオンや儀式によって実体を与えられると考えている。コミュニオンに関わる事例では、目に見える形で共同行為を同時に行うことによって、共同体が経験されていることに注意したい。同じ対象に対して同じように振る舞うこと[10]によって、想像の世界が日常に目に見える形で存在していることが保証される。そして、この時、現にここに存在しているという点で想像の共同体は単なる「空想の共同体」とは区別される形で再生産されている。以上のような想像の共同体の発生における巡礼圏とコミュニオンの相補的な機能を考えてみると、若林による台湾における想像の共同体の成立に関する議論はこの共同行為に関する部分の説明がやや手薄であるように思える。

そこで本稿は日常的な生活圏を越えた「台湾」社会を想起可能な共同行為と共感の醸成を行いうる場として、どのような場が想定しうるのかを検討していく。これは一方で、政治や「族群」の面で対立が顕在化しながら、まがいなりにも「台湾」という共同体が想像されたのはどのような場における共同行為の結果であるのか、ということを検討することでもある。政治的な想像の共同体の基礎であり前提である連結した相互意識は、どのような共同行為によって構成されるのか。

三章　共同行為を可能にする制度と場

本節では、コミュニオンを可能にする制度として共同行為の場に注目する。そこでまず、共同行為についての研究がこれまでどのように行われてきたのかを確認し、その後それらの研究の特徴を検討しながら、本稿の問題意識を提示していく。

一節　先行研究

共同行為を可能にする場として、これまでの研究では定期市の社会的機能に注目する研究、廟を中心とした祭祀圏

や信者圏に注目する研究、社会運動や選挙に注目する研究などがあった。これらをそれぞれ概観しておく。

財貨の交換を通じた社会秩序の形成についての研究では、市場における交易の経済機能のみでなく社会的機能について触れられている（Malinowski 1922＝二〇一〇，Mauss 1925＝二〇〇九）。近年でも、宮内洋平がタンザニア農村部における定期市の研究において、もともと「貧しい農民に現金収入の機会を与える」ために開設された定期市が社交・娯楽機能を提供していることを指摘している（宮内　二〇〇五）。

中国社会については、G・W・スキナーが四川省におけるフィールドワークを基に、伝統中国における農村社会で、定期市が重層的な社会的ネットワークの形成に重要な役割を果たしていることを指摘した（Skinner 1964）。この研究によれば、人々は「自分の市場」を認識しており、それぞれの村は排他的にひとつの市場圏に属している。そして婚姻の紐帯や親族の結合、宗教祭祀など農民の実際の社会関係を取り結ぶ範囲は村の狭い境界線よりも市場圏の境界線に左右される。このように、日本と比較して村落共同体の凝集性が弱く、個人間の関係のネットワークを中心に緩やかに形成されている中国の地域共同体において、「市場共同体」がより強い影響力を発揮していることが見て取れる。

一方、台湾においては、地方においても商業化の度合いが進んでおり常設の店舗が村の中に存在すること、交通網の発達によって大規模な市場に出向くことが容易であること、移民社会であることから方言の相違などが地理的条件よりも制約的に働くことなどの条件によって、スキナーのモデルがそのまま応用できるとは言えない（Crissman 1972）ものの、少なくとも定期市が村落などの小さな社会単位の境界を越えて、より大きな地域の中に社会関係を構築することを誘発する機能を持っていることは指摘できる。

台湾での「村落」を越えた広い社会単位の研究は上述の指摘を受けて、方言ごとの住み分けをより明確に反映した単位として「祭祀圏」の概念に注目している。三尾裕子はこのような祭祀圏は廟を中心に構築されており、共同に行う祭祀などが社会関係の結節点を構成していることを指摘した。またこのような圏の内部での社交には濃淡があり、祭祀圏は地域的な面を覆うものとしては捉えにくいものの、祭祀圏と社会活動の最大範囲が重なってくることが指摘されている（三尾　一九九一）。また、この研究に関連して廟が個人の参加を通じたネットワークを構成することも指摘されている（上水流　二〇〇〇、末成　一九九一）。呉豪人は台湾における祭祀公業が家族、宗族、同姓者、同出身者グループのアイデンティティを構築する装置として存在していたことを指摘しており、その古い想像力と国民国家の新しい想像力の関係について検討している（呉

一九九九)。これらの研究では、日本語の「共同体」の語感に比べれば幾分軽い意味においてであるものの、日常生活圏を越えた地域的な共同体が廟という場と制度によって成立していたことが指摘されている。ただし、呉が指摘するようにこのような廟を通じた共同経験は、宗族や同出身者グループを読み込みやすく、市民的で包摂的な共同体と対抗的な「民族的」意識と結びつきやすい傾向がある。

最後に、このような共感を構成する共同行為として「選挙」および「社会運動」に関する先行研究がある。一例として若林(二〇〇三、同 二〇〇八)によれば、台湾ナショナリズムが一九七九年の美麗島事件[11]を分水嶺として社会運動を中心に発展したことが指摘されている。また、一九九〇年代の李登輝による「中華民国憲法」の改正によって住民の全面的国政選挙参加が次第に可能になり、選挙期間での選挙活動を通じて、台湾ナショナリズムが民衆レベルでの共同意識を構成していったという点も指摘されている。しかし、同時にこのような政治的動員が、排他的なエスノナショナリズム[12]を生み出す側面があり、「族群」や「宗族」に根ざさない包摂的な想像の共同体の構成をかえって損なう可能性にも触れられている。

二節　問題意識

さて、このような先行研究をまとめると、定期市における研究では、1. 定期市が異なる生活圏から訪れる人々の間での関係のネットワークの結節点としての機能を持っていること、2. そのような出会いと関係の構成の結果、社会関係は同じ市場を利用することを契機として発展しやすいこと、の二点が述べられている。しかし、台湾においては、「族群」の差異が地理的な隣接より制約的に働きやすく、祭祀圏や信者圏などの廟を中心とした場によって他者との交流の機会を持ちやすい。このような祭祀圏や信者圏による交流は「族群」的な共同性を呼び起こしやすい。この「族群」を基礎とした共同性は近代化と民主化を経た制度の下でも影響力を持っており、選挙における活動や社会運動などの政治的な動員がエスノポリティクスを呼び起こしやすい。この点で政治的行動がかえって民族的な差異を呼び出してしまい、台湾社会の国民的な包摂を引き裂く危険性を具えていることが分かる。

では、「族群」という単位に回収されない想像の共同体は、空想の産物に過ぎず実体を持たないのであろうか。しかし、この結論は、九〇年代からの意識調査において、政治体制としては「現状維持」が選択され、アイデンティティについては、近年「台湾人」の回答が増加しつつあるものの、「台湾人でもあり、中国人でもある」がそれなりの支持を集めているという事実[13]と、いかに整合的に議論できるのであろうか。つまり、「台湾大」の社会統合とは全く政府のイデ

オロギーであって実体を持たないものであるのだろうか。

本稿では以上のような問題意識の上で、政治的な想像の共同体の基礎となる生活や参与者の実感に根ざした共同体意識の構成に寄与する共同行為を促す活動として、台湾夜市という場に注目していきたい。その際に夜市の利用実態と夜市に対する意識に特に注目することで、夜市が新しい想像の共同体のコミュニオンの場として、つまり「族群」や「宗族」の境界を越えた、市民的共同体の基礎としての、生活レベルにおける包摂的な共同体意識の構成に寄与していることを明らかにする。

四章　夜市の利用実態と夜市イメージ

本節ではまず、夜市についてのこれまでの研究と資料を概観する。その後、夜市における報告者の調査データから特に夜市の参加者たちの夜市の利用の実態と彼らが夜市という場にどのようなイメージを持っているかを確認する。そして夜市における出会いが、彼らの共同体意識に与える影響について検討を行う。

一節　「夜市」の定義

いわゆる「夜市」と呼ばれる商業集積について政府レベルでの明確な定義は存在しないが、主に夜間に公共の空間を中心として屋台（攤販）や露店（地攤）が集結している場のことである。台北市の市場管理処は夜市を「夜市とは、夜の六時から十二時までを営業時間とし、有効な管理の下で営業を許可された露店のことであり、台北市民に夜間の休息、街遊び、消費場所を提供するもの」（王振宵二〇〇三）と定義している。

しかし、現象面で考えてみると、単に屋台が集積しているだけでは「夜市」と呼ぶには十分でない。同時にこのような屋台が人々を引きつけ賑わっていることが「夜市」の必要条件である。例えば観光夜市である華西街夜市付近には、観光夜市化（一九八五年）されて以降に広州街夜市と呼ばれる新しい夜市が出現した。現在はこの広州街夜市も正式に観光夜市として認められたが、華西街夜市が設備面で政府からの投資を受け綺麗に整った環境になったにも関わらず、賑わいの中心の移動が見られた。なぜ人々は立派にアーケードがあり、より伝統的な飾り付けがある華西夜市ではなく、広州街夜市を好んだのか。分かりやすい事例として二〇一二年三月に広州街で出会った男性Cさん（二〇代）への聞き取りの一部を挙げる。

筆：なぜ、華西街ではなくてこちらの夜市によく来るのですか？

C：なぜって、華西街の方は屋根もあって濡れなくてい

いけど、あまり人通りがなくて、お客も観光客ばかりで寂しい感じがする。あの辺りは賑やかさが足りなくて夜市とは言えないよ（那裡不夠熱鬧，怎麼會叫夜市阿）。

このように、夜市という現象においては少なくとも設備面だけでなく、他に多くの人々が参加していること、賑やかであることが重要な要素となっている。

図1　士林夜市の地図
出所：台北市観光夜市ハンドブック 2015

二節　夜市の利用実態

A．調査地の概要―士林夜市

いわゆる「士林夜市」は、文林路、大南路、基河路の三つの道路に囲まれた部分を指し、その中に士林市場、慈誠宮などを含む。おおよその面積は六千坪でここに五〇〇ほどの屋台と三〇〇ほどの商店が集まっており、毎晩五～八万人の人を集めている。

図2の写真から分かるように店舗と人の数の多さによってかなり緊密した空間になっている。士林夜市の基本的な空間構造としては道路の両側に商店があり、その商店の騎楼[14]に融合する形で屋台が展開されている。また街路の中央には、衣服や服飾品を売る「地攤」と呼ばれる無店舗型の

図2　士林夜市の様子（2009年　於大東路）
出所：筆者による撮影

露店が展開される。この無店舗型の露店はほとんどが正式な認可を受けずに営業しているため、警察の見回りの際には、見張り役の「警察が来たぞ（**警察來了！**）」の声を合図に、市場や商店の中に逃げ込み姿を消す。近年、士林における警察取締の厳格化によって、この「地攤」が士林から消えつつあり、夜市の賑わいが以前ほどでなくなっていることが、消費者の間で話題になっている。

A―2．調査地の選定の理由

士林夜市は台北で最大の規模を誇り、台北の中で最も著名な夜市である。それゆえこれまでの研究の蓄積も他の夜市と比較して、進んでいる。また、余舜徳及び周耿生の台湾夜市の市場システムに関する研究（二〇〇四）において、台北市区において士林夜市だけがその集客圏域が最も広い都会型夜市[15]の類型に当てはまることが指摘されている。本稿の問題関心は、夜市が台湾社会において「族群」や「宗族」の境界を越えた想像の共同体を具体化する場として機能している可能性について検討することであるので、より集客圏域の広い夜市を対象とする方が目的に適っている。以上の理由で、本稿は士林夜市を調査地として選定した。

B．調査の概要

夜市で実際に報告者が行った調査の調査概要は以下の通りである。

調査期間：二〇一二年七月一日―二〇一二年七月二五日
調査場所：士林夜市
調査対象者：台湾人消費者
調査法：質問紙調査およびヒアリング調査
サンプル数：二八二（回収率五六％）
※夜市の消費者を対象にする調査であったため母集団の推定が難しく、サンプル抽出においては無作為抽出が不可能で有意抽出にならざるをえなかった。このため、本調査はサンプルの代表性の点で限定性を持つ。

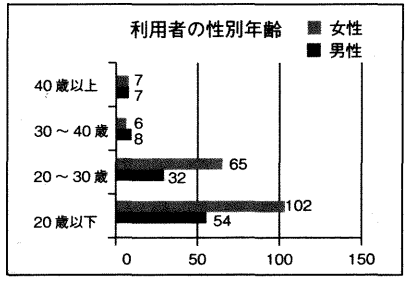


図3　利用者の年齢性別

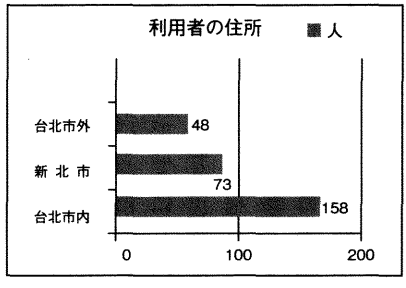


図4　利用者の住所

C. 調査対象者の属性

まず利用者の性別年齢を見てみると、二〇歳以下の若者が多数を占めていることに気がつく。これは、この士林夜市付近に多数の学校（東呉大学・文化大学・銘傳管理学院）があることが影響しているだろう。また特に三〇歳以下の層で、女性の参加者が多い。これはこの夜市が衣服や服飾の品揃えが豊富であることとも関係していると思われる。また職業の面では参加者の大多数は学生である。このような調査結果から士林夜市は、若者、特に学生向けに特化した夜市であると言えるだろう。しかし、調査を行ったのが夏季休業の期間であったこと、学生がアンケートの回答に協力的であったことも影響しているかもしれない。

参加者の住所に関しては、台北市内からやってきている人々が六割、残りが市外からやってきた人々であった。ただし、士林夜市自体が台北市の北の外れに位置するため、市内の場合でも遠方からの利用者を含んでいる可能性、あるいは市外からの参加者でも比較的近隣の利用者を含んでいる可能性がある。

D. 夜市の利用状況

士林夜市の利用実態については、大別して二つの傾向に分離すると思われる。全体の三割の参加者が一回の訪問で三〇〇元以下しか使わないのに対して、一五〇〇元以上使

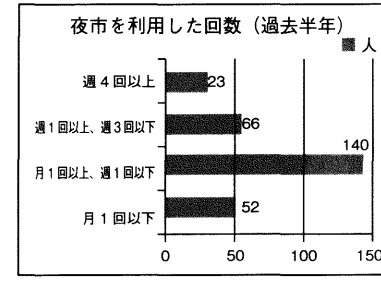


図５　夜市の利用頻度

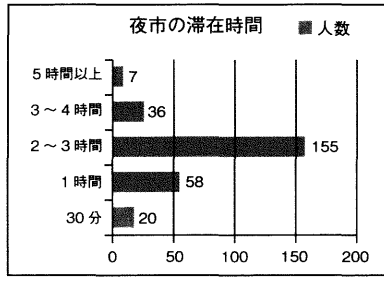


図７　夜市での平均滞在時間

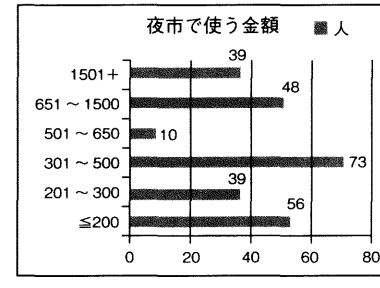


図６　毎回の利用金額（NTD）

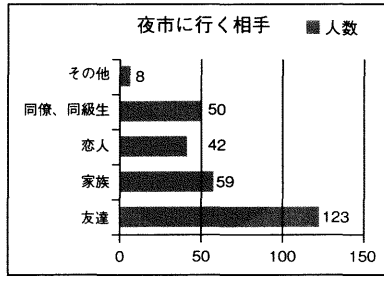


図８　一緒に夜市に行く対象

う参加者が一割以上存在する。この差異は恐らく夕食を取り、夜市を散歩するタイプの利用法と、服などの買い物をするタイプの二つのパターンの利用法が存在するためだと考えられる。また、月に一回以上訪れる参加者が八割を占め、もっとも多いのは一ヶ月に数回利用する参加者である。このことから、夜市の利用頻度は食料品を買うための市などと比較すれば日常的ではないことが分かる。しかし、月に一度以上訪れる参加者が大多数を占めているため、余暇活動の場所としての用途が見て取れる。

この利用法の推測を裏付けるように、夜市の滞在時間は二時間以上が多くを占め、単なる食事や買い物を行うための場としては、利用時間が長くなる傾向がある。また夜市に一緒に行く相手は友人や家族などの親しい間柄が多いことが分かる。また親しい間柄の相手の中でも、恋人と訪れることはそれほど多くない。着飾らずに自然体で振る舞うことを求める大衆的な雰囲気や不衛生である種の猥雑さを伴う夜市の環境の影響があると考えられる。

E. 夜市と参加者の共感の構成

では、参加者たちは夜市の場にどのような印象を持っているのだろうか。

この三つの設問は、夜市に対する共同体的な意識が存在するかについて調べる意図で採用された設問である。どの

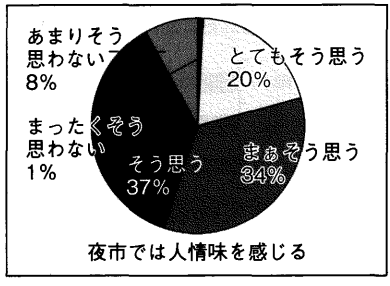


図11　夜市における人々の交流の印象（N＝277）

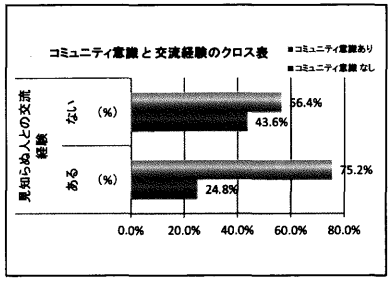


図12　コミュニティ意識と交流経験クロス表のグラフ

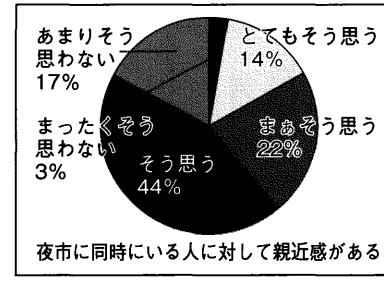


図9　夜市参加者の親近感（N＝274）

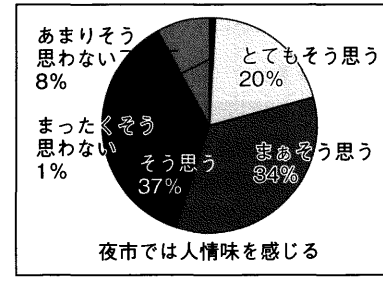


図10　夜市における人情味（N＝277）

設問においても否定的な回答は二割以下の割合を占めるに過ぎず、特に「人々の交流」（図11）と「人情味」（図10）に関する設問では、五割以上の人が積極的に肯定的な回答を行っているのが見て取れる。以上のように参加者たちは夜市に対して、人間味や人情味を感じ、また交流が盛んな印象があると回答している。少なくとも参加者たちの感覚の上で、夜市は交流が盛んで、共に夜市にいる人々に対して親近感を覚え、人情味を感じる場所であることが分かる。

また、夜市では実際に他者との交流が起こりやすい。例えば、夜市における見知らぬ人との交流の経験についての質問では、四二・九％（一一七人）が「見知らぬ人との交流経験がある」と回答した。では、このような見知らぬ人の交流経験[16]と彼らの意識の関係はどうなっているのか。これを確認するために上述の三つの夜市に対するイメージの回答（1とてもそう思う～5まったくそう思わない）の値を合計した変数である「コミュニティ意識（3～15）」を作り[17]、値の上半分を「コミュニティ意識がある」、下半分を「コミュニティ意識がない」として変数のカテゴリー化を行い、クロス表分析を行った。

クロス表分析の結果、見知らぬ人との交流経験がある人はコミュニティ意識を持つ人が全体の七五・二％を占めるのに対して、交流経験がない人の場合では五六・四％の人がコミュニティ意識を持つに留まった。この両者を比較すると交流経験の有無によって、一八・八％の人のコミュニティ意識の差が出ており、危険度〇・一％の水準で有意な差が認められる。つまり、見知らぬ人との交流経験は夜市において共在する匿名の他者に対する親近感と関係している。

表1　コミュニティ意識と交流経験のクロス表

			変数共同体意識		合計
			なし	ある	
見知らぬ人との交流経験	ある	度数	29	88	117
		%	24.8%	75.2%	100.0%
	ない	度数	68	88	156
		%	43.6%	56.4%	100.0%
合計		度数	97	176	273
		%	35.5%	64.5%	100.0%
カイ2乗検定			カイ2乗値：10.320　有意確率:0.001		

出所：質問紙調査結果より筆者作成

五章　考察

夜市の場はそこを訪れる人々に共同体を感じさせる機能を果たしている。また、この夜市という制度は実際に見知らぬ人々同士が交流することを促すことがあり、このような交流の経験がある人は、経験のない人と比較して、有意にコミュニティ意識を持っていることが分かった。つまり、

夜市は人々に自分がよく知らない人々を含めた大きな共同体の中で生活していることを、現実感を持ったものとして体感させていると考えることができるだろう。

しかし、夜市という活動に参与することによって、参加者が人情味や人間的交流を感じる場合、それはどのような過程によってなのだろうか。例えば、ある五〇代の台湾人男性は、自身の夜市での記憶と経験を次のように語った。

Y：昔の（圓環）夜市の店には看板もメニューもなかった。だから、私たちもその店が実際どんな名前だったかは分からない。だけど、何曜日のどの場所に出ている何を売っている屋台っていうだけで、みんなその店が分かった。分からない奴はモグリだと思ったね。間違いなく私の街に住んでいる人間は皆その店のことが分かっていて、少なくとも一回はその店に行ったことがあったと思う。

筆：そこに行ったことがあるかないかが重要ということですか？

Y：もし、お互いにその店のことを知っていたら、「あぁ、こいつは分かっている奴だ」って安心できたかな。逆に知らないとその人はこれまでどういう暮らしをしてきたんだろうって不思議に思った。（二〇一五年八月一四日　於寧夏夜市）

表2　台湾人消費者の夜市に対する印象（自由記述）

Q. もしある日夜市がなくなったとしたら、どのような変化が起こると思いますか（自由記述）	度数	%	累積%
退屈になる	88	25.4%	25.4%
行くところがなくなる	36	10.4%	35.8%
台湾ではなくなる	28	8.1%	43.9%
つまらなくなる（面白みがなくなる）	23	6.6%	50.6%
食べ物がなくなる	21	6.1%	56.6%
特色がなくなる	19	5.5%	62.1%
楽しくなくなる	18	5.2%	67.3%
文化がなくなる	18	5.2%	72.5%
不便になる	11	3.2%	75.7%
（以下度数10以下の項目を省略）	－	－	－
計	346		100%
※複数の項目に当てはまる回答あり			

出所：質問紙より筆者作成

夜市という空間の経験は「私」の街に住んでいる「みんな」に共有されており、「分からない奴はモグリ」だという表現から、この経験の有無が「みんな—よそ者」という区別を構成していることが分かる。また、この経験の共有は「暮らし」と関わっており、私にとっての具体的な生活が、匿名的なみんなたちとも繋がっていることに現実感を持たせている。

同様に質問紙調査の自由記述の内容からも、夜市が彼らにとってどのような場所であると認識されているのかについて見てみたい。一九三頁の表は自由記述の内容をその回答内容にそって分類したものである。

この結果によれば「退屈になる」「つまらなくなる」「楽しくなくなる」などの、個人的な歓びに関する項目が夜市と関わっていることが分かる。しかし、これらの回答では、なぜ夜市がなくなることでこれらの個人的な歓びがなくなるのかの理由は明らかではない。この理由としては次の二つの可能性が読み取れる。まず、「行くところがなくなる」「食べ物がなくなる」「不便になる」という歓びを充足する手段がなくなるからという点。そしてもう一点が、夜市が「台湾」「文化」であり、台湾社会の「特色」であるという点である。

このうち台湾文化に関わる具体的な回答の事例は以下の通りである。

・想像できない。夜市は生活用品みたいなもので、いつも使う必要がある。（二四歳、女性、親北市在住、サービス業）
・生活が少し面白くなくなる。なぜなら夜市は私たち台湾人の寛ぐ場所だから。（一五歳、男性、台北市外在住、学生）
・なくならないよ。もしなくなったら私が夜市を開く（四七歳、男性、台北市外在住、公務員）
・食べるのが不便で、デートも不便で、ショッピングも不便で、一番重要なのは台湾文化が見当たらなくなること（二六歳、女性、台北市内在住、ホワイトカラー）
・多様性と友好さが欠けて退屈になると思う。台湾の夜市は多様な食べ物、親切な台湾の人々みたいな台湾文化のセットだと思う。夜市がなかったら、今日の台湾はないよ（二二歳、男性、台北市内在住、学生）

これらの回答からは以下のようなことが読み取れる。まず、夜市があって当たり前のもので不可欠なものだと認識されていること。また、夜市が台湾文化の一部と捉えられていること。そして、夜市が私たち台湾人にとって重要な場所であるという認識である。

夜市における共同行為による共同体意識の構成が廟や国家的な儀式と異なるのは、以下の点においてである。台湾

においてはこれまでの歴史的経緯から、あらゆる社会的場面で「族群」と「政治」に関する衝突が読み込まれやすい傾向がある。これに対して、夜市の場における活動は取るに足らない場と思われているがゆえに、このような政治的動員から比較的守られている。例えば、ある中年の台湾人男性が筆者に対して言った言葉はこの点で印象的である。「こんなところ（士林夜市）で小難しいことを言うんじゃない。細かいこと言わずに食べろ」[18]。この言葉は、彼にとって夜市は「小難しい」ことを議論する場ではなく、そのようなことを持ち込まずに、ただ同じように楽しむ場であるという認識があることが分かる。つまり、政治的あるいは族群的な面倒を持ち込まずに、他者との交流を楽しめる場所として、夜市は認識されていると考えられる。

六章　終わりに

本稿では、台湾における政治的な想像の共同体の前提条件である、「族群」の境界を越えた連結された相互意識の発生の可能性について、夜市における共同行為による共感の醸成という観点から考察した。この「台湾」という共同体は、伝統的な「族群」の想像の方法とは異なる方法で想像される必要がある。そこで、夜市での共同行為の経験が台湾サイズの共同意識構成のための基礎となっている可能性について検討してきた。

日常の生活圏以上の大きさの全ての共同体は、構成員たちの想像力を経由することで可能になっている。つまり、想像の共同体は彼らが実際に暮らしている環境と切り離されているという点で抽象的な側面を具えている。しかし、この想像の共同体は、ただ抽象的なだけでなく現に存在していることが構成者たちの目と体によって確認可能でなければならない。そして想像の共同体は出会わないかもしれない人々を含んだ共同体であるから、この想像の共同体の存在の確認は「族譜」などを通じた具体的関係に依ることはできない。つまり、匿名の他者と実際に出会い、経験を共有することを通じて、この抽象的な想像の共同体は具体化される必要がある。

夜市の場はそこを訪れることがなければ出会わない人々と出会い、同じ経験を共有することを可能にしている場であり、日常で出会うことのない人々に対する共感と関わっている。もちろん、同様の機能を担っている社会活動の場は夜市の他にも存在すると考えられるが、少なくとも夜市は現代の台湾において想像の共同体を現実化するための制度の一つとして機能していると言えるだろう。

註

(1) アンダーソン　二〇一四：一七

(2) 族群という言葉の用いられ方は台湾においても歴史的な変遷があるが、本稿ではエスニック・グループの訳語として用いる。台湾においては一般には「原住民」、「客家人」、「閩南人」および「外省人」の四大族群が存在するとされる。

(3) この「台湾社会」という表現ではそのまま国民国家を指しているわけではなく、むしろその構成員たちが主観的に思い描く「私たち」という集団に重点がある。

(4) アンダーソン以外の代表的な論者としては、アーネスト・ゲルナー（『民族とナショナリズム』1983＝二〇〇〇）、エリック・ホブズボウム（『創られた伝統』1983＝一九九二）などが挙げられる。

(5) あらかじめ断っておくと、アーネスト・ゲルナーなどと異なり、アンダーソンがネーションを「文化的人造物」と呼ぶ際には、だからネーションは構築物であり価値がないとする判断を含まない。むしろ、アンダーソンにとって関心があるのは、このような人造物が、特定の人たちにとって、かけがえのないものとして認識されていることである。

(6) スペイン領アメリカの最初の小説の出版は一八一六年で独立戦争勃発のずっと後のことである。

(7) 士大夫は宋代以降における科挙試験に合格した官僚を指す。時には同様の学識を収めた在野の知識人階級を含めることもある。

(8) 伝統中国における地方社会において文化的・社会的地位を有する者を指す。

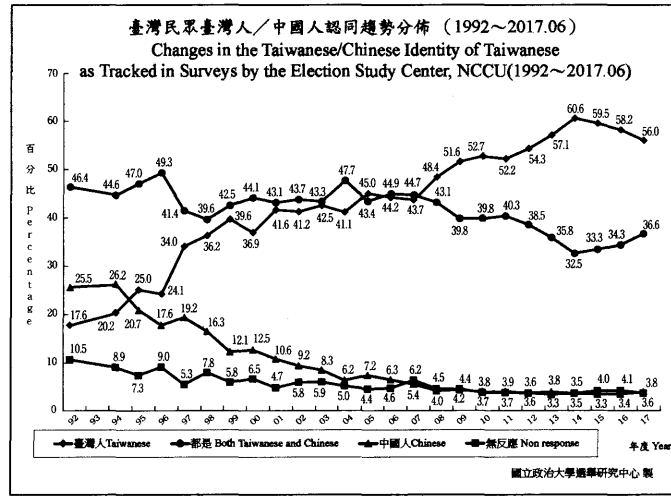
(9) ここでの「旅」という言葉には日常の中断と日常生活からの遊離という含意がある。例えば、「誕生から死に至る旅は、さまざまの宗教観念を生みだした」（Anderson [1983] 2006＝二〇〇七：九八）ように、このような「旅」の過程で旅人は時間・空間・身分的な変化を伴い、「旅」はそれらの解釈を要求する。

(10) このような振る舞いとその対象を、象徴を基礎にした文化的共同体の議論を行ったアンソニー・P・コーエンに倣って「儀礼」と「象徴」と呼ぶことも可能だろう。

(11) 国民党の一党支配下にあった一九七九年十二月に台湾南部の高雄市で起きた反体制運動弾圧事件で、「高雄事件」とも呼ばれる。反体制指導者だった黄信介氏を発行人として同年五月に創刊された雑誌「美麗島」（台湾の別名）が、高雄市で十二月十日の世界人権デーを記念した集会を企画。当局が無許可を理由に阻止しようとして集まった市民らと衝突し、二〇〇人近くが負傷する騒動となった。黄氏ほか、現副総統の呂秀蓮氏ら「美麗島」側の人物が軍事裁判にかけられ、反乱罪で有罪判決を受けた。

(12) 「台湾ナショナリズムによるエスニックな動員に見られた『福佬ショービズム』へのマイノリティ（客家人、先住民族）の不安を、外省人エリートが組織し、これに対してさらに人口多数派の福佬人が反発するような相互不信を強めていくような構図も現れ始めている」（若林　二〇〇三：一五一）。ここで見られるのは政治的な対立が同時に「族群」の対立と重なり合う形で用いられており、政治的対立が民族的対立とオーバーラップすることで政治の民族化が進んでいることである。

(13) 例えば政治大學選舉研究中心による民族アイデンティティの調査結果は以下のようになっている。



出所：政治大學選舉研究中心『台灣地區選民投票行為之研究』

(14) 騎楼とは街路に面した建築の一階部分を三、四メートルほど柱廊として開放する建築方法で、台湾や中国南部、東南アジアなどで見られる建築方式である。夏季の日差しやスコールという気候条件がこのような建築に影響を与えていると言われる。

(15) 余および周の整理によれば、夜市はその集客圏の違いによって社区型夜市、地方性夜市、都会型夜市に分類することができる。

(16) このような「交流経験」は様々なレベルの経験を含んでいることが想定される。たとえばある回答者（三〇代　台北在住　女性　二〇一五年八月二七日　於士林夜市）は交流の経験について次のようなエピソードを挙げた。

M：台北に遊びに来た友達と一緒に大声で話しながら夜市歩いていたら、たぶん後ろを歩いていた人たちが旅行に来た人で、私が「このお店は台湾で一番美味しいから食べなきゃダメ」「今日は絶対これを食べたい」とか話していたのを聞いていたみたい。で、五〇歳くらいだったかなぁ、おじさん四人だったんだけど、「お姉さんはこの辺の人ですか、良かったら一緒に夜市を見て回ってご飯を食べませんか。その代わりに私たちが奢るから」って言われて。それで、結局、彼らと一緒に夜市を見て回ったんだ。

もちろん、全ての交流経験がこのような長時間に渡るはっきりとしたものであるとは限らないだろう。しかし、その場合でも少なくとも彼らが「交流」と認識することのできる出来事を経験していることが想像の共同体の観点からは重要である。

(17) この三つの設問は全一二問から構成される夜市に対するイメージについての設問の一部であり、このイメージの因子分析において同一の因子に分類される設問である。

(18) 二〇一三年十月一九日士林夜市での聞き取り

参考文献

Anderson, B., 2006, *Imagined Communities: Reflection on the Origin and Spared of Nationalism (1991 Revised and Expanded edition)*, London: Verso.（＝二〇〇七、白石隆・白石さや訳、『定本　想像の共同体――ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山）

――――,1998, *The Spectre of Comparisons: Nationalism, Southeast Asia and the World*, London/New York: Verso.（＝二〇〇五、糟谷啓介・高地薫他訳、『比較の亡霊――ナショナリズム・東南アジア・世界』作品社）

――――、二〇一四、小川信彦・水垣源太郎編、『ベネディクト・アンダーソン　奈良女子大学講義』かもがわ出版

Crissman, L.W., 1972, "Marketing on Chunghua Plain, Taiwan", W.E. Willmott(ed.), *Economic Organization in Chinese Society*, California: Stanford University Press, pp.215-259.

上水流久彦、二〇〇〇、「台湾の祭祀圏と信者ネットワーク――台北市の寺廟を事例に」『アジア社会文化研究』（一）：一三―三五、アジア社会文化研究会

Malinowski, Bronislaw, 1922, *Argonauts of the western Pacific*.（＝二〇一〇、増田義郎訳、『西太平洋の遠洋航海者――メラネシアのニュー・ギニア諸島における、住民たちの事業と冒険の報告』講談社）

三尾裕子、一九九一、「台湾漢人の宗教祭祀と地域社会」『国立民族学博物館研究報告　別冊』（一四）：一〇三―一三四、国立民族学博物館

Mauss, Marcel, 1923-1924, *Essai sur le don*（＝二〇〇九、吉田禎吾・江川純一訳、『贈与論』筑摩書房）

宮内洋平、二〇〇五、「定期市の社交・娯楽的機能の定量分析――タンザニア農村部・盛り場の考現学」『史苑』六五（二）：五五―八八、立教大学

末成道男、一九九一、「台湾漢族の信仰圏域――北部客家部落の資料を中心にして」『国立民族学博物館研究報告　別冊』（一四）：二一―一〇一、国立民族学博物館

Skinner, G.W., 1964, "Marketing and Social Structure in Rural China, Part 1", *Journal of Asian Studies*, 24(1): 3-43. Association for Asian Studies.

楊嵐鈞、二〇〇四、『《夜市》文化地景之地域性研究』未出版碩士論文、國立台北科技大學、台北市

余舜德、一九九五、「空間、論術與樂趣　夜市在臺灣社會的定位」黄應貴主編、『空間、力與社會』、三九一―四六二頁、中央研究院民族學研究所

――――、一九九九、「夜市研究與台灣社會」徐正光・林美容主編、『人類學在台灣的發展』、八九―一二六頁、中央研究院民族學研究所

余舜德・周耿生、二〇〇四、「台灣夜市市場系統的發展：――以台北都會區及台南縣為例」『民族學研究所資料彙編』第一八期：一―四二、中央研究院民族學研究所

若林正丈、二〇〇三、「（研究ノート）現代台湾における台湾ナショナリズムの展開とその現在的帰結――台湾政治観察の新たな課題」『日本台湾学会報』（五）：一四二―一六〇、日本台湾学会

――――、一九九四、「台湾をめぐる二つのナショナリズム――アジアにおける地域と民族」、平野健一郎編、『講座現代アジア　4　地域システムと国際関係』東京大学出版

――――、二〇〇八、『台湾の政治――中華民国台湾化の戦後史』東

京大学出版会
王振宵、二〇〇三、『從台北市夜市區間與定位探討夜市營運及管理政策之研究』台北市市場管理處
呉豪人、一九九九、「植民地台湾における祭祀公業制度の改廃問題」『日本台湾学会報』（一）：五四―七五、日本台湾学会

参考資料

・台湾省屋台管理規則、経済部、中華民国八八年
・臺北市營業衛生管理自治條例、台北市政府、中華民国六六年
・高雄市屋台管理自治条例、高雄市政府、中華民国七六年
・『102年攤販經營概況調查報告』、行政院主計總處、中華民国一〇三年
・『台灣地區選民投票行為之研究』、政治大學選舉研究中心
・『台北市観光夜市ハンドブック2015』、台北市政府